

カンボジア人日本語学習者の音声上の問題点 ―ジャ行とヤ行・ジャ行とチャ行の混同―
The problems with pronunciation of the Cambodian learners of Japanese Language:
Confusion of “Ja-gyō” and “Ya-gyō”, “Ja-gyō” and “Cha-gyō”

佐藤 貴仁

SATO Takahito

早稲田大学大学院生：〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-7-14

Graduate School of Japanese Applied Linguistics, Waseda University : sato@soon.com

Abstract : This research is analysis of phonetic confusion of the Japanese “Ja-gyō” and “Ya-gyō”, “Ja-gyō” and “Cha-gyō” by the Cambodian learners. As a result of investigations that it divided into three levels of the lower, middle, and higher rank group, it showed that there are two phonetic confusions and error changes in each level. From these results, consider an effective method of instruction and the order of presentation.

キーワード：クメール語、子音の混同、上位群・中位群・下位群、誤用の変化

1. はじめに

本研究はクメール語を母語とするカンボジア人日本語学習者のチャ行・ジャ行・ヤ行の生成調査から、当該3種の音の混同とその誤用の方向性を明らかにした上で、習得過程で誤用の傾向がどう変化するかを調査したものである。

2. 先行研究

法貴（2000）は、カンボジア人初級学習者3名を対象に聴取・リピート・発話調査を行った。このうち、発話調査の結果ではジャ行→ヤ行、チャ行→ジャ行という誤りの方向性を指摘している。しかし、調査対象者は初級に限定されている上、少数であるため、一般化するには更なる量的な調査が必要であると言える。

また、石田（1991）は同一の母語話者間でも、習得段階に応じて音声上の誤りが変化することを指摘している。よって、調査結果を発音レベルに分け、レベルごとに分析する必要がある。そうすることで、学習者の音声習得の過程を推定すること即ち、おおまかな音声習得の段階を捉えることができると考える。

3. 調査概要

調査対象者：カンボジア国内で日本語を学習している大学生 66名

調査対象音：チャ行・ジャ行・ヤ行の音

調査対象語：対象音（語頭・語中の2環境）

に「マ」を付加した無意味語 計18語

調査方法：対象語を1語ずつ提示し、対象者が読み上げたものを録音。その音声データを聴覚判断により記述した。

4. 調査結果

4.1 レベル別結果

全調査対象者の総誤用数を元に、下・中・上の3群に分けたところ、表1の結果となった。

表1 レベル別の誤用数とその割合

対象音	下位群 (22名)	中位群 (24名)	上位群 (20名)
	誤用数(/132) 割合(%)	誤用数(/144) 割合(%)	誤用数(/120) 割合(%)
ジャ行	103 78.0%	100 69.5%	61 50.8%
チャ行	43 32.6%	33 22.9%	17 14.2%
ヤ行	39 29.6%	27 18.8%	12 10.0%

4.2 対象音別の誤用傾向

対象音別の調査結果から、各下位群で認められた主な誤用傾向は以下の通りである。

- ・ジャ行→**チャ行**・シャ行・**ヤ行**・直音化・ヒヤ行
- ・チャ行→シャ行・**ジャ行**・ヒヤ行・直音化・キャ行
- ・ヤ行→**ジャ行**・ギャ行

この結果から、ジャ行⇄ヤ行・ジャ行⇄チャ行の音の混同があることが明らかになった。つまり、カンボジア人学習者に見られるチャ行・ジャ行・ヤ行の誤用は、法貴（2000）の指摘による一方的な誤りではなく、双方向に言い換えることが確認された。この下位群で認められた誤用傾向がレベルによってどう変化するかを次項に示す。

4.3 対象音別の誤用傾向の変化と割合

以下に音別の主な誤用傾向とその変化を誤用数（表）と誤用の割合（図）で示す。

・ジャ行

表 2 ジャ行の誤用傾向と誤用数

	→チャ行	→シャ行	→ヤ行	直音化	→ヒヤ行
下位群	65	26	2	7	3
中位群	60	20	15	3	0
上位群	37	7	17	0	0

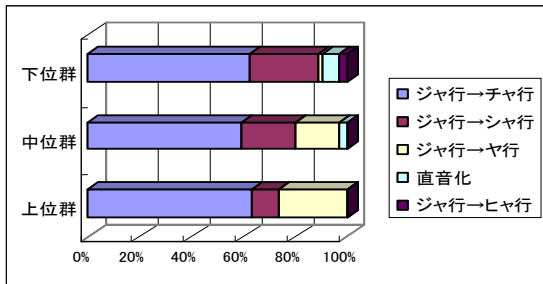


図 1 ジャ行のレベル別誤用傾向の割合

・チャ行

表 3 チャ行の誤用傾向と誤用数

	→シャ行	→ジャ行	→ヒヤ行	直音化	→キャ行
下位群	29	5	3	2	4
中位群	18	7	3	3	0
上位群	0	16	0	0	0

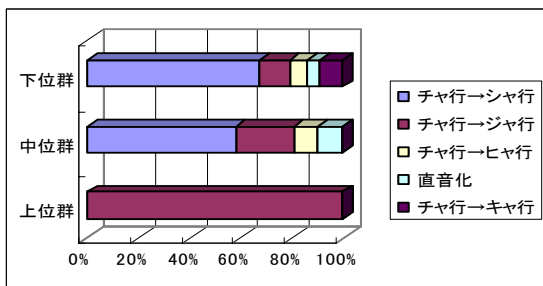


図 2 チャ行のレベル別誤用傾向の割合

・ヤ行

表 4 ヤ行の誤用傾向と誤用数

	ユ→ジュ	ヤー→ジャ	ヨ→ジョ
下位群	23	6	5
中位群	17	5	4
上位群	10	2	0

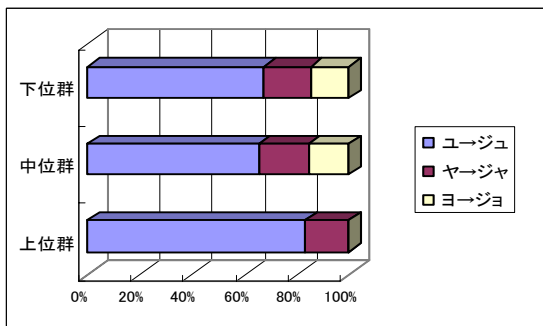


図 3 ヤ行のレベル別誤用傾向の割合

5. 考察

ジャ行の誤用はレベルを通して「→チャ行」が最も多く、誤用数は減少するものの、各レベルの誤用の割合はほぼ同率であることから、

一定して出現する誤りだと言える。一方、ジャ行を有声摩擦音として捉えることにより、その無声音であるシャ行として発音された誤用も見受けられる。しかし、「→チャ行」よりも誤用が少数であり、レベルが上がるにつれ、その数も減少することから、ジャ行子音を摩擦音よりも破擦音として捉えている学習者が多いことが示唆される。よって、破擦音の有声（ジャ行）・無声（チャ行）の違いを意識させることが、より効果的な発音指導に結び付けられると考える。

チャ行における下位群の主な誤用傾向である「→シャ行」は、破擦音であるチャ行が摩擦音であるシャ行として発音される誤りである。しかし、この誤りはレベルが上がるに従って減少し、上位群では全く観察されなくなることから、根強く残る誤用パターンではないことが示唆される。しかしその一方で、「→ジャ行」という誤りが、レベルが上がるにつれ増加し、上位群ではその割合が 100%となっている。これは、元々チャ行の発音ができていたのにも関わらず、わざわざ有声化して誤用を招いているケースが考えられる。クメール語の/cʰ, c/は破裂音として定義されているが、破擦音と捉える向きもあることから、クメール語の音素をそのまま転用すれば、チャ行の発音は特に問題ないため、ある種の逆転現象が起きている可能性がある。

また、「ヤ行→ジャ行」の誤りはヤ行の総誤用数の 92.3%を占めることから、ほぼ一定の方向性があると言える。内訳は全レベルにおいて、「ユ→ジュ」が「ヤ→ジャ」「ヨ→ジョ」を上回る。この原因として、ヤ・ヨの母音/a/・/o/は広母音である一方、ユの母音/u/は狭母音であることから、後続母音の影響で、ユの子音/j/の摩擦が強くなることが考えられる。また、「ユ→ジュ」は語頭で多く観察されることから、ヤ行の音の中では習得難度が高いと言える。よって、ヤ行をジャ行に言い誤る学習者に対する指導の目安として、「ヨ→ヤ→語中のユ→語頭のユ」という段階的な指標を提示することができる。

6. 今後の課題

調査結果を踏まえ、学習者に音の混同の意識化を促すと共に、効果的な指導法を考案する必要があると考える。

【参考文献】

- 石田敏子 (1991)「フランス語話者の日本語習得過程」『日本語教育』75 号, 64-77
- 法貴則子 (2000)「ベトナム人、カンボジア人、ラオス人学習者の音声上の問題点」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第 26 号, 183-198